紅粉名稱

〔七十一番歌合上〕十四番　右　ゑろいものうり

秋寒み雲も殘らぬ月かげは霜とみるまで ゑろい物哉〇略中

戀すとや人のみる覽おしろいのきはつくまでに流す涙を

〔本朝町人鑑一〕古帳よりは十八人曰

素貌でさへ白きに、御所白粉を寒の水にてときて二百へんも摺付け、手足に柚の水を付てたしなみ、〇略下

〔大和本草十四陸蟲〕金龜子　死タルヲ、婦人白粉ノ器中ニ入ヲク、

〔毛吹草二〕白粉（おしろい）　水かね　玉虫　貝の玉

〔嬉遊笑覽一容儀下〕玉虫を白粉の中に貯ふること、〇略中　江戸枝折、椰の葉に今玉むしのうしろ向、また眞珠をはらやに雜て置けば、其珠分身して數多くなるとて、兒女のすることなり、懷子俳諧集十　白粉箱のふたの明くれ、いつの間にふんじにけらし貝の玉、重長

〔倭名類聚抄十四容飾具〕經粉　釋名云、經粉、和名閉邇、經、赤也、染使赤、所以著頰也、今按經卽頡字也、

〔釋名四首飾〕經粉、經、赤也、染粉使赤、以著頰上也、

〔箋注倭名類聚抄六容飾具〕經粉　按閉邇、見源氏物語常夏卷、榮花物語本雫卷、御裳著卷、皆謂以燕脂和粉著之顏面、好色賦施朱則太赤者卽是、今俗所謂桃色於之呂伊是也、今俗直以燕脂爲倍爾、與古異、〇略中　崔豹古今注、燕支中國人謂之紅藍、以染粉爲面色、謂爲燕支粉、是卽釋名所謂經粉可證、此引無粉字者非是、

〔中華古今注中〕燕脂

蓋起自紂、以紅藍花汁凝作燕脂、以燕國所生故曰燕脂、塗之作桃紅粧、

〔事物紀原三冠冕首飾〕燕脂